

市民参加演劇公演

「わが町、せんがわ」

三部作、遂に完結！

二〇一一年の秋から始まった市民参加演劇公演「わが町、せんがわ」が、今年二月の公演「わが町、せんがわ」〜おらほの時代（まつり）〜をもって、シリーズ三部作として完結しました。オーディションで選んだ公募出演者と専門家出演者に「当て書き」するスタイルで、毎回オリジナル脚本を書き下ろし、演出も担当した末永明彦さんに各作品についてコメントを寄せて頂きました。（一部割愛。文責・編集部）



「わが町、せんがわ」シリーズでは、小学生から80歳代までの幅広い参加者が、専門家とともに本格的な舞台をつくり上げました。



●第一作 「ちいさな劇場の物語」では、仙川に実在した「ちいさな劇場」をモチーフに、町のちいさな劇場の最後の一日と、新しく誕生する劇場（せんがわ劇場がモデル）への継承をイメージした物語に、受け継がれる人から人への大切な想いを、テーマ曲「幸せになるために」に込めて上演。

●第二作 「サネアツさん」は、武者小路実篤記念館のご協力のもと、仙川ゆかりの武者小路実篤氏自身を描くのではなく、実篤氏が一貫して主張し続けた「人生の賛美、人間愛」をモチーフに、この町から旅立った一人の少年の物語。やがて少年は、一流の音楽家としてこの町に帰ってくる中で回想する。「サネアツさん」とあだ名された、一人

の男との幼き日の思い出。彼の周りにはいた大人たちのほげまし、友人との別れ、成長を描いた。「良き大人に育てられた子どもは、やがて、良き大人に育ち、良き子どもを育てる」がテーマに。

●第三作 「おらほの時代（まつり）」は、これからの「わが町」仙川を考える時に「いまはなき、この町を愛し支え続けて来られた多くの人たち」の想いをコンセプトに描きました。幕末、昭和二〇年の終戦、昭和三元

年の東京オリンピックという、大きな時代の転換期に、実際にこの町で起きた事、生きた人々をモチーフに、「あきらめない」というメッセージを込めました。そして、二〇一四年二月一日。三部作、ここに完結。終えて、いま、思うこと。幸せになるために必要なこと。

自分を信じる心。人を信じる心。自分を愛する心。人を愛する心。そして、誰の命も、どの命も大切に想う心。そういう人たちが多くなったら、少しは平和な、幸せな世界になる——そんな願いを込めて、「わが町、せんがわ」三部作を上演して参りました。この願いが、少しでも「わが町、せんがわ」に携わった多くの人たち、観て頂いたお客様、おひとりお一人の御心に届き、育まれますように。（末永明彦）



「みんなが創る みんなで創る」を合い言葉に、舞台装置や美術制作、衣裳製作なども、専門家の指導のもと、多くの市民の手でつくられ、あづられた舞台。写真中央は、大量の割り箸を組み合わせてつくった舞台装置

劇場を支える 様々なスタッフ

せんがわ劇場は「調布市直営の劇場」です。常勤の市職員や技術スタッフのほか、非常勤の音楽・演劇の専門嘱託員や、受付業務担当のホールスタッフなど、様々なスタッフがこの劇場を支えています。…では、各スタッフはどんな役割や仕事をしているのでしょうか？ 今号は、劇場の市職員を代表して高橋さんに伺いました。

私たち市職員は、市民や地域の皆様との委員会運営や、自主企画事業や施設の利用など、劇場で行われる取り組み全体を調整する役割を担っています。いわば、最前線の現場にある劇場と行政の橋渡し役です。一人でも多くの方に「この劇場と出会ってよかった」と思ってもらえることが重要な務め、と胸に刻んでいます。

当劇場の事業では、ホールやリハーサル室といった施設の貸し出しも大事な事業ですが、演劇の公演、コンサートなどを一から企画して創り上げる「自主企画事業」を年間を通じて行っています。そして、市民サポーターをはじめとする市民の皆様にも、直接・

間接に事業に関わっていただき、多様なサポートをいただけるのも、自主企画ならではの特色です。こうした芸術文化事業に携わらせていただく中で、市民の皆様、地域の方々、舞台芸術の活動者の新しい文化交流の場が生まれ、劇場そのものも成長していると実感しています。芸術鑑賞以外にも「参加して楽しむ」「一緒に創って楽しむ」様々な取り組みを行っていますので、ぜひ一度ご来場ください。

調布市生活文化スポーツ部 文化振興課 主査 高橋昌起



※演出家であり、様々な公演の舞台監督や企画制作等も手掛けられてきた末永さんは、せんがわ劇場の演劇・市民参加・地域連携コーディネーターを務めています。